前橋城絵図帳

前橋市立図書館所蔵資料

前橋城絵図帳

前橋市教育委員会

前橋城絵図帳

前橋市立図書館所蔵資料

前橋市教育委員会

巻頭言

前橋城は、天正一八年（１５９０）、徳川家康の江戸入府にともなって、平岩親吉が入ることで、近世城郭として整備が始まったと言われています。その後、慶長六年（１６０１）酒井雅楽頭重忠が川越から入り、以後一五〇年にわたる酒井家の前橋城整備が始まります。前橋城は、まさに酒井雅楽頭家の城であったのです。本書は、酒井雅楽頭家に伝世され、菩提寺の龍海院に納められた前橋城にかかる絵図を中心として、紹介するものです。その全貌が公にされるのは初めてのこととなります。また、大正五年（１９１６）に開設された前橋市立図書館が、これまで収集してきた前橋城関連資料も合わせて公表するもので、これも、その全貌が明らかにされるのは初めてのことです。

現在、わずかにその面影を残す再築前橋城は慶応三年（１８６７）に竣工したもので、その後、群馬県庁として使用されてきたものです。江戸時代の初め、最も華やかな時代の前橋城は、ここに紹介した絵図でしか、うかがい知ることができません。

私ども前橋市教育委員会は、これらの貴重な資料を末永く保存し、前橋市の為に活用していこうと考えています。本図録もその一環といえます。

本図録が広く多くの皆さんに活用されることを期待し巻頭言といたします。

平成二九年七月三日

前橋市教育委員会
教育長　塩﨑政江

前橋城絵図帳 ―前橋市立図書館所蔵資料― 目次

巻頭言
例言・凡例
目次
1．酒井雅楽頭家の城絵図（旧龍海院所蔵資料）
(1) 現存する最古の前橋城絵図……2
(2) 城普請に係る絵図……6
(3) 利根川の瀬替えに係る絵図……10
(4) 城下絵図及び上野国絵図他……18
2．松平大和守時代の城絵図
(1) 前橋入府時の前橋城絵図……39
(2) 川越移城の頃の前橋城絵図……42
(3) 再築前橋城絵図……45
3．書き写された城絵図
(1) 昭和初年に前橋図書館により書き写された城絵図……51
(2) 前橋市史編纂事業で書き写された前橋城絵図……60
解説……62
4．前橋城絵図の意義……73

例言・凡例

一、本書は、前橋市立図書館が所蔵する前橋城に関係する絵図を集成したものである。平成二七年度の前橋市重要文化財の新指定「前橋藩酒井家前橋城絵図　附　上野国絵図ほか関係資料」の指定を記念して企画したものである。

二、本書で使用した資料名は、昭和五五年に龍海院から、前橋市が購入した際に調査した名称及び番号（酒井〇―〇）を使用している。また、前橋市立図書館が独自に収集した資料には、歴史資料として（k222―〇）の番号が付されている。

三、（酒井〇―〇）の表記がある資料については、平成二八年三月一五日付けで前橋市の重要文化財として指定された資料群である。

四、絵図の寸法は縦×横（センチメートル）で表記している。

五、それぞれの絵図は後世の補修、表装のため当初の状況をほとんど残していない。寸法については現在の寸法を基本とした。

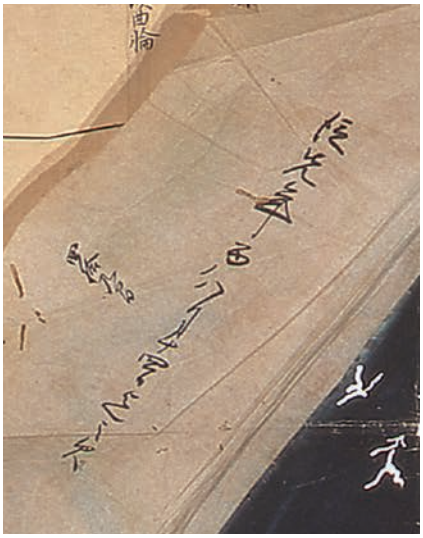
六、本書の編集、執筆は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課が行い、文責はすべて同課にある。また、絵図の撮影は、たつみ写真スタジオによる。

七、本書の作成に当たり、本市文化財調査委員岡田昭二氏、群馬県立文書館、前橋市立図書館には多大なるご厚意とご協力を賜った。また、所有絵図の画像の使用について快諾をいただいた龍海院過外章道御住職、田代美和氏、印東健夫氏に記してお礼を申し上げます。

1. 酒井雅楽頭家の城絵図（旧龍海院所蔵資料）

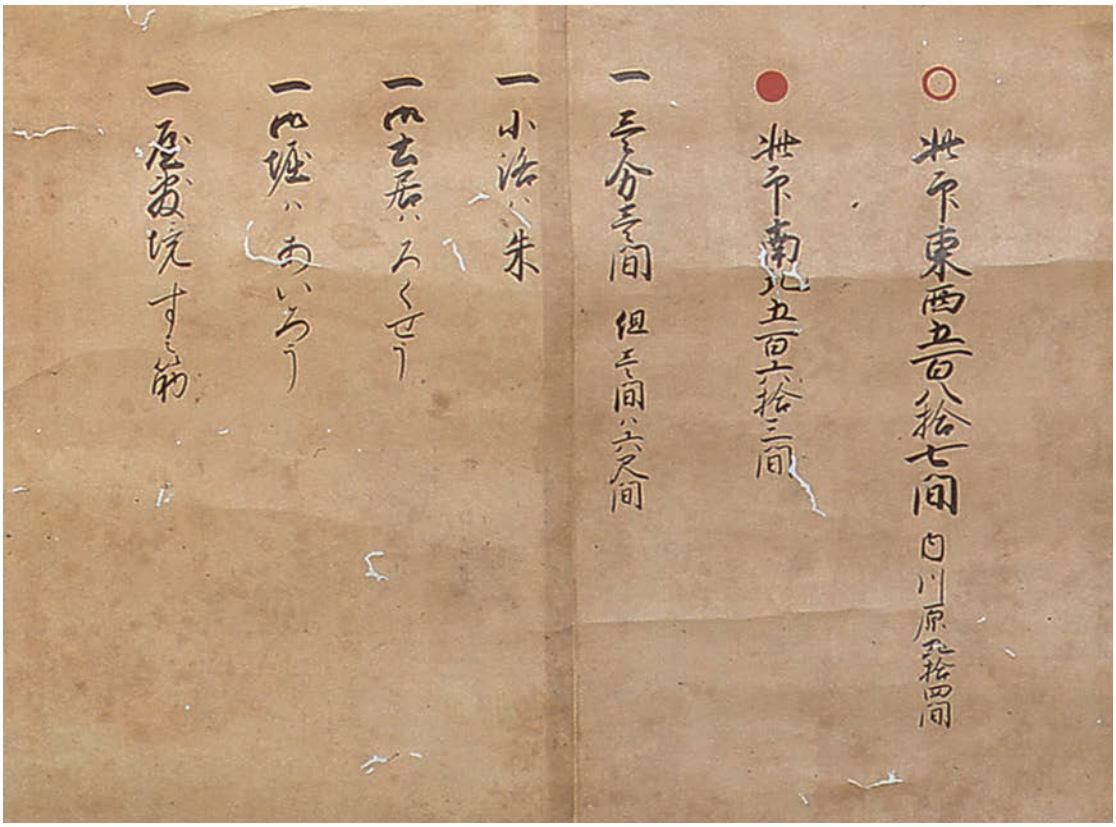
(1) 現存する最古の前橋城絵図

1. 前橋城絵図（酒井1-9）206×205

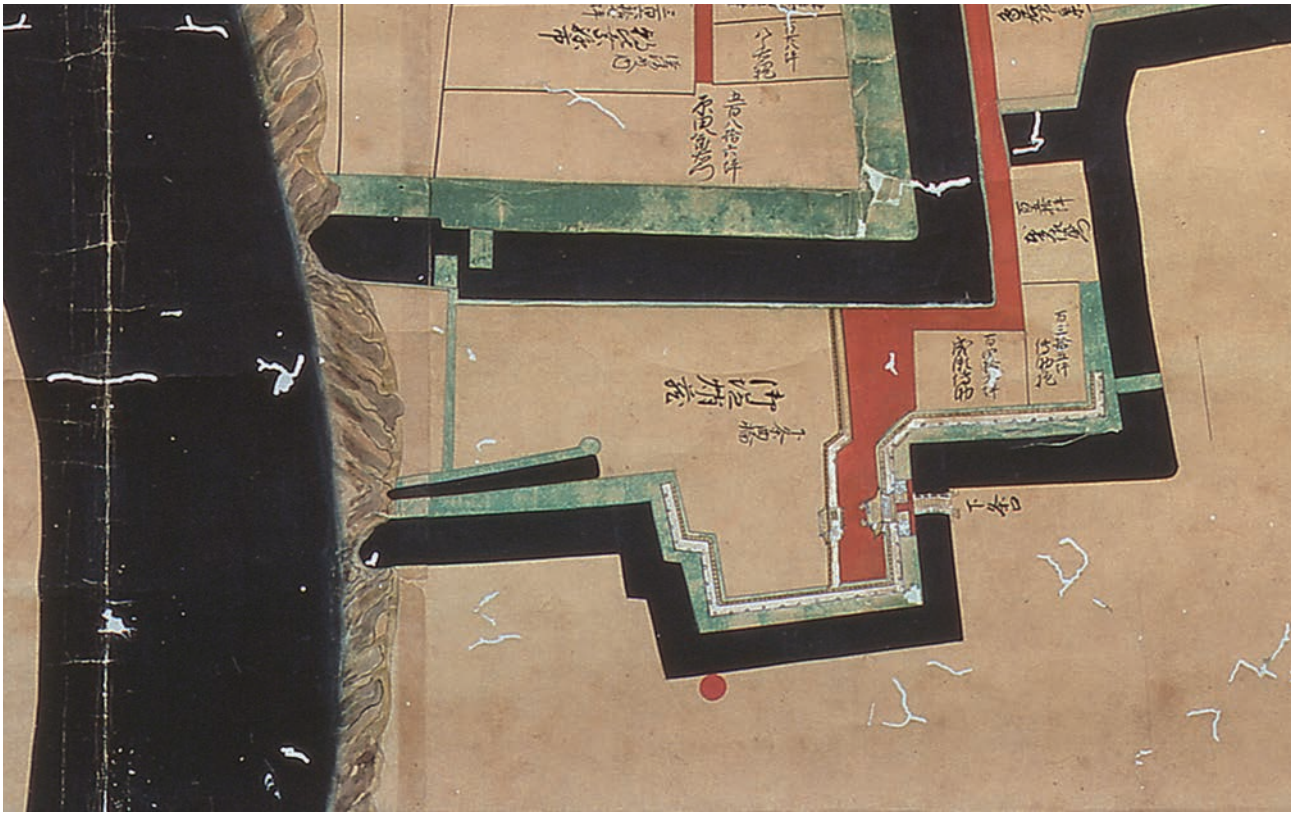


1-1（付箋部分）

1-2（付箋の下の絵図）

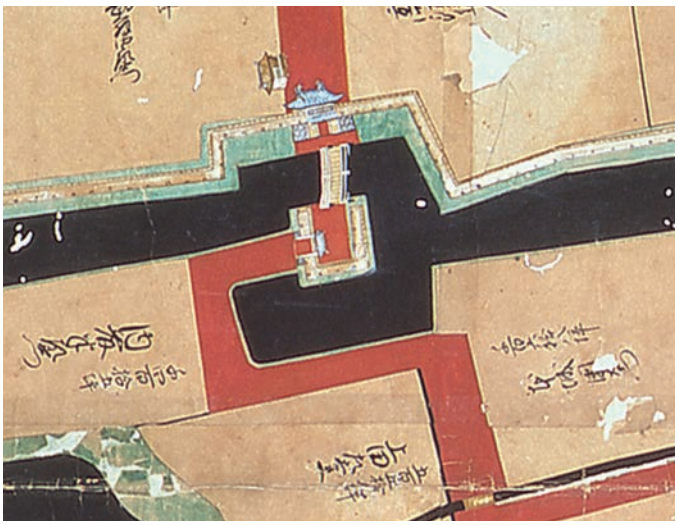


1-3（右下の凡例）

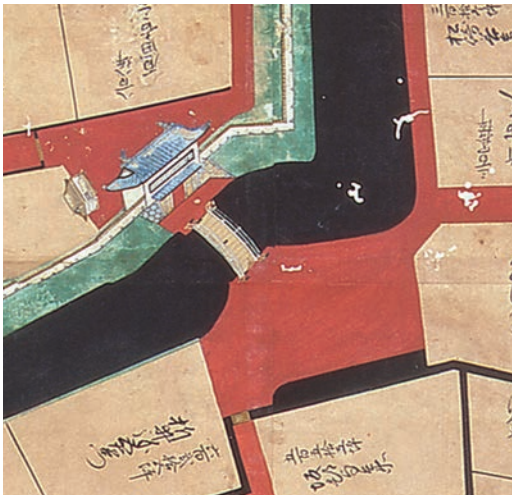


1-4（下条曲輪）

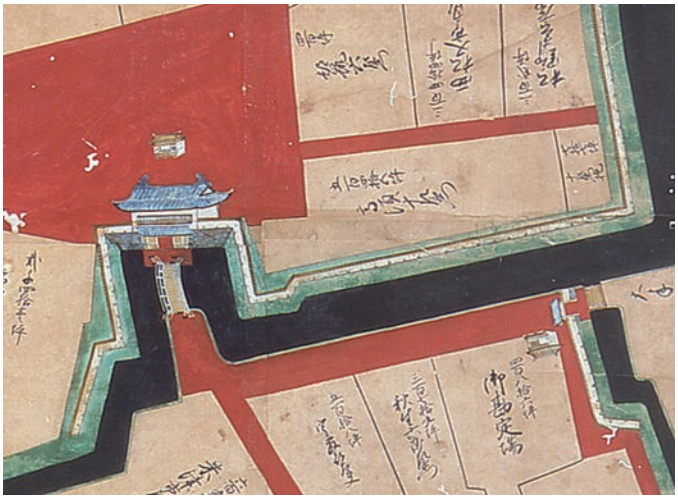
1-5（本丸）



1-6（三の丸）

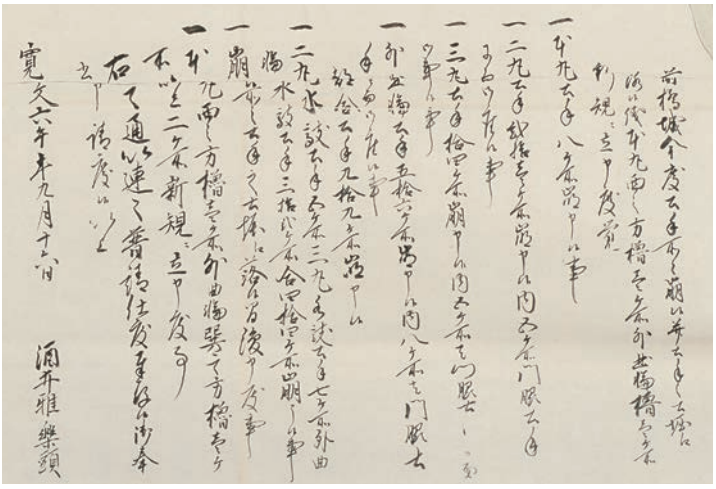


1-7（車橋門）

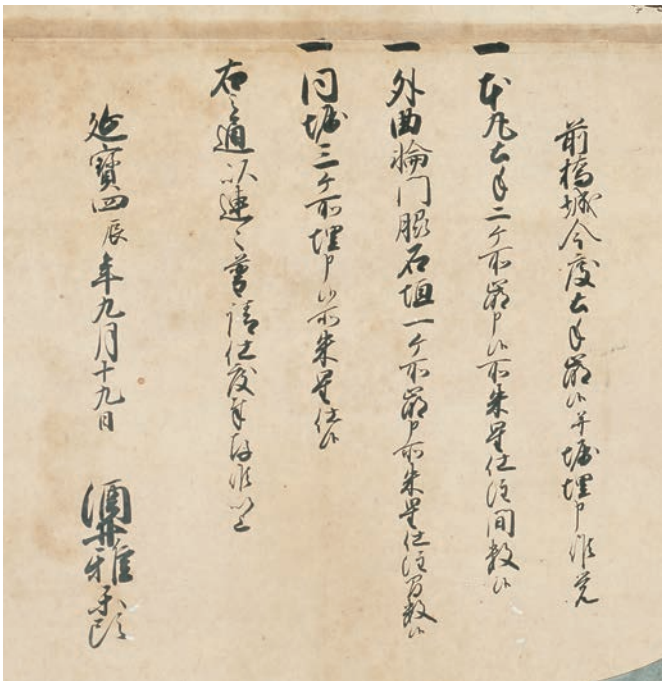


1-8（大手門）

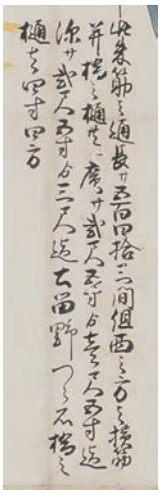
2. 前橋城絵図（酒井1-1）130.5×132.5

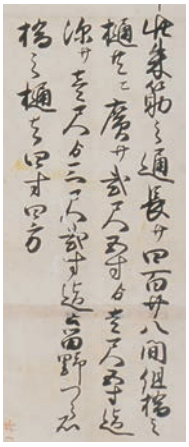


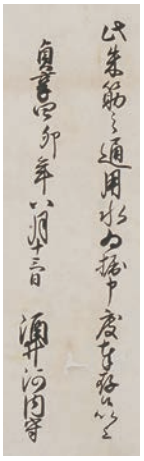
3. 前橋城絵図（酒井1-2）56×70


前橋城今度ゟ
一ゟ九ゟ二ヶ所ハ
一外曲輪門脇
一同城三ヶ所
右之通以速
延寶四辰年九月十九日

4. 前橋城絵図（酒井1-10）94×85



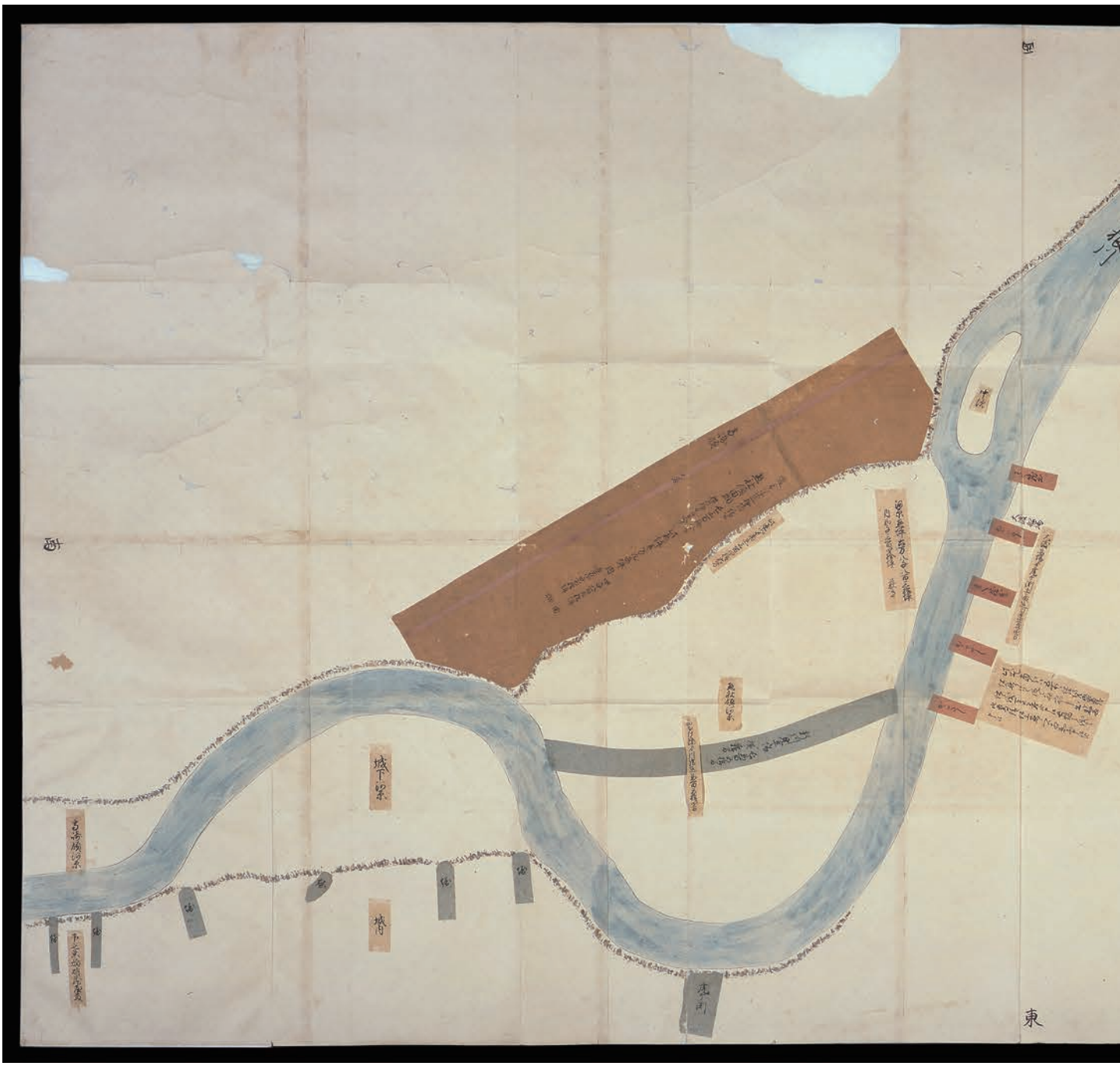


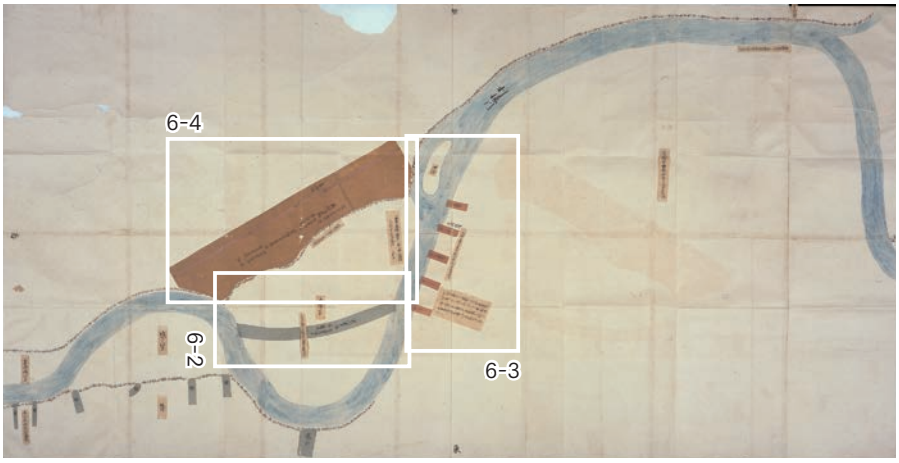


5. 前橋城絵図（酒井1-13-1）111×94

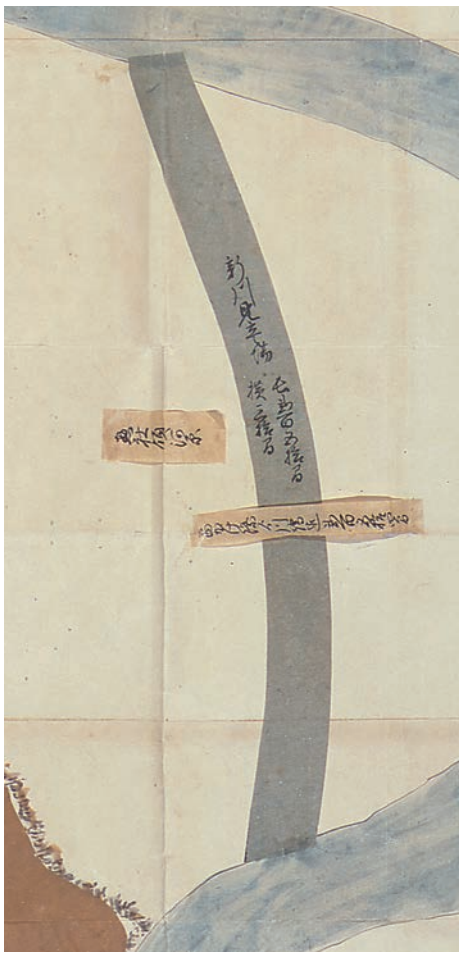
(3) 利根川の瀬替えに係る絵図

6. 名倉八兵衛見分之新堀絵図（酒井1-5）121×239

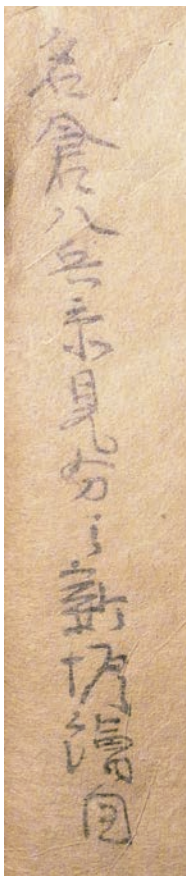

城下堀
城内
東


6-4
6-2
6-3

6-3（制水施設）



6-2（新川見立場）



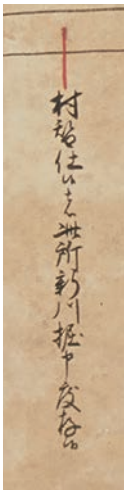
6-1（表題）

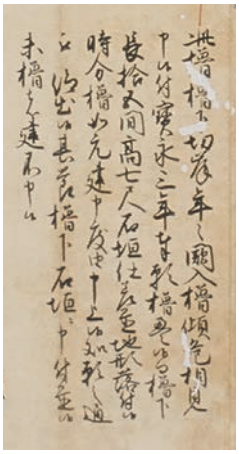
6-4（対岸の総社領）

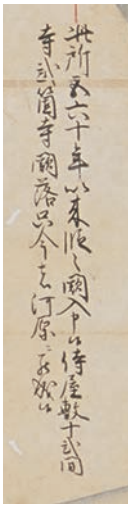
7. 前橋城絵図（酒井1-13-3）177×152

8. 前橋城絵図（酒井1-12-1）129×133.5

9. 前橋城図（酒井1-12-2）119.5×118







10. 前橋城（酒井1-13-2）81.5×83

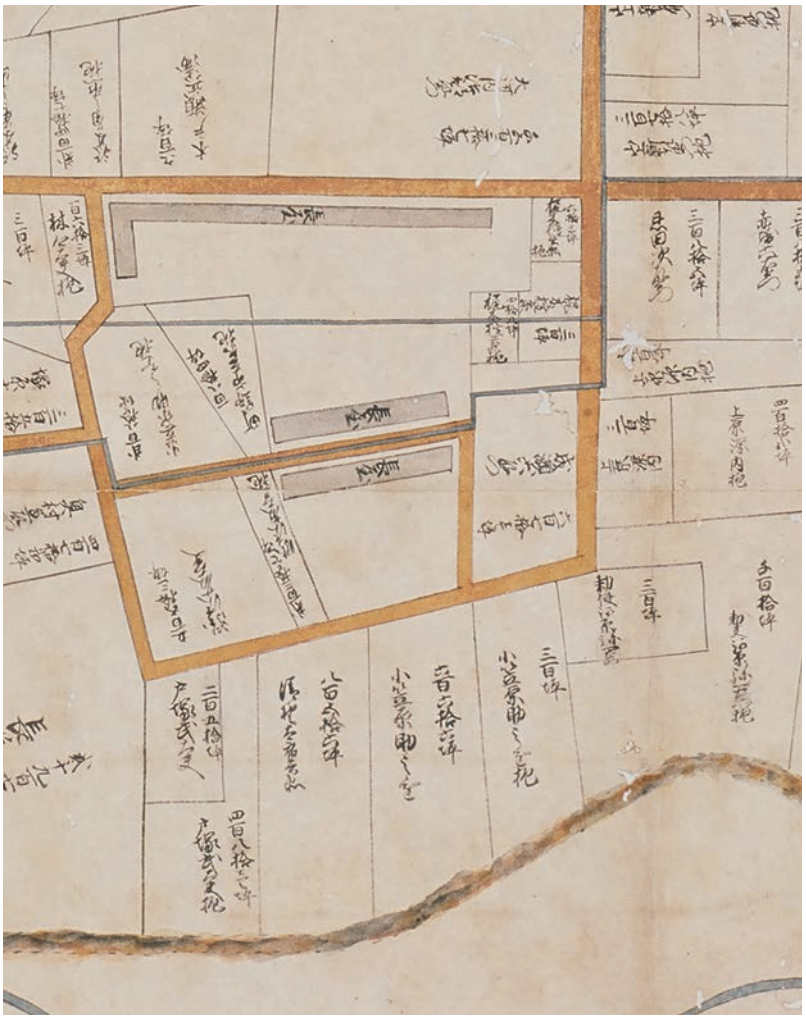
11. 前橋城（酒井1-12-3）117×117

12. 前橋侍屋敷之図（酒井1-3）93×133

東
北
西

12-1（本丸と二之丸）

12-2（藩校・求知堂）



12-3（侍屋敷と長屋）

13. 前橋外曲輪御絵図（酒井1-4）105×152

13-4（現在の三河町の寺院群）

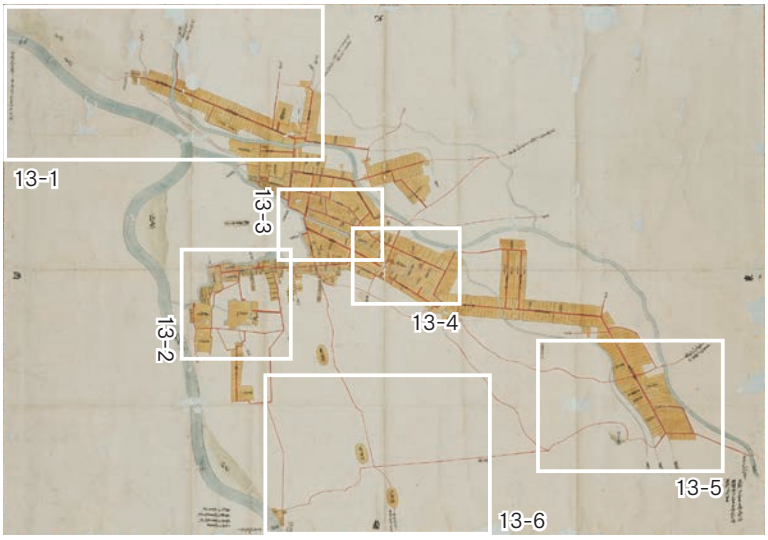
13-3（大手口の札の辻）

13-2（龍海院とその西の寺院群）

13-1（大渡の渡し場と番屋）

13-6（東道と真正の渡し）

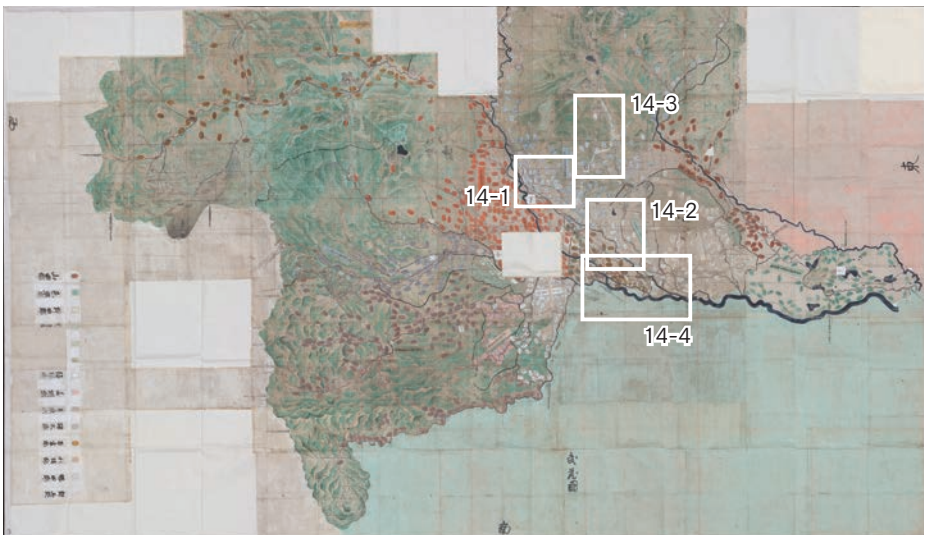
13-5（天川二子山古墳）



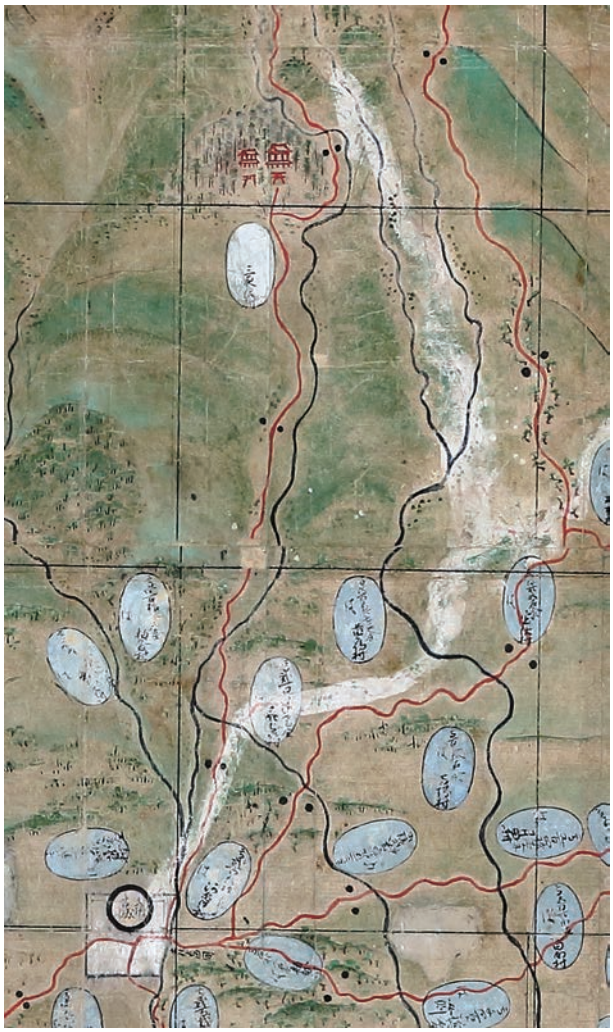
14. 上野国絵図（酒井1-8）366×574

南
西
秋田郡
色麻郡
仙北郡
仙北郡
雄勝郡
平鹿郡
河辺郡
秋田郡
山本郡
南秋田郡
北秋田郡
鹿角郡

14-1（前橋城下と勢多郡の村々）



14-2（伊勢崎城付近）



14-3（旧勢多郡大胡町・三夜沢付近）

14-4（玉村五料の渡し付近）

15. 前橋領図（酒井1-7-1）179×124

16. 前橋領図（酒井1-7-2）178×120.5

17. 前橋領図（酒井1-7-3）168.5×115

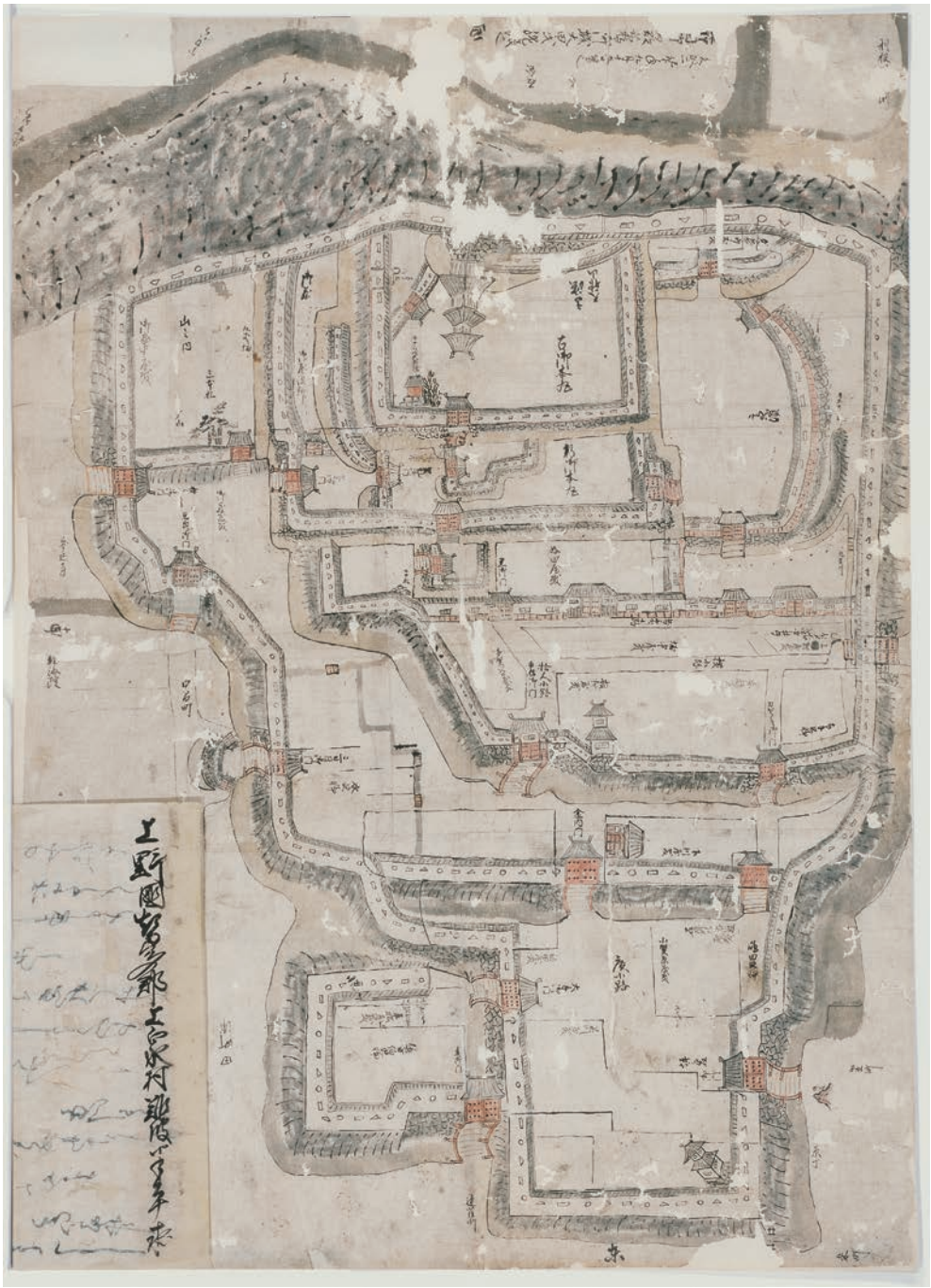
18. 対馬守御陣屋絵図（酒井1-14）127×138

19. 前橋城図（k222136-4）84.5×60

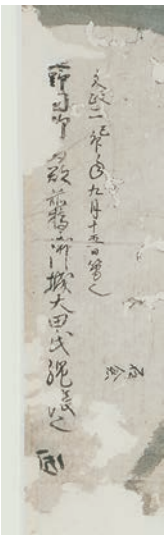
20. 前橋城図（k222136-7）104.5×80

2. 松平大和守時代の城絵図

(1) 前橋入府時の前橋城絵図

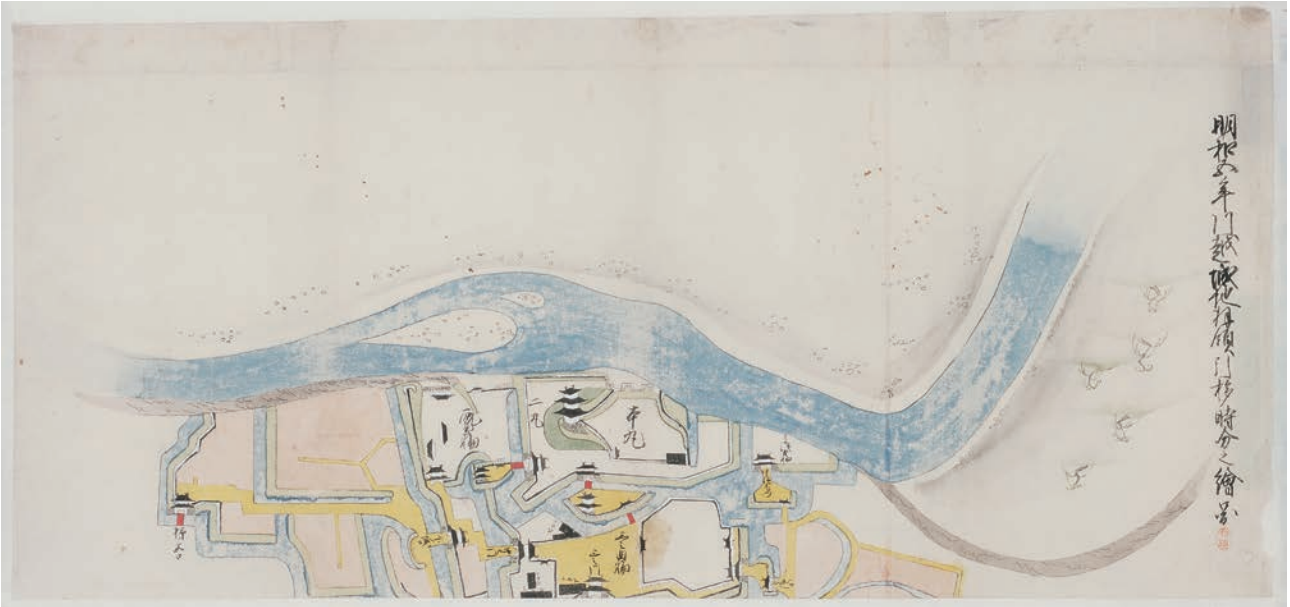


21. 前橋城絵図　72×51.5



22. 前橋城絵図（k222136-9）69×66.5

23. 前橋城絵図部分（k222136-5）34×67.5



24. 前橋城絵図部分（k222136-11））33×67.3

(2) 川越移城の頃の前橋城絵図

25. 前橋城絵図（k222136-13）114×104

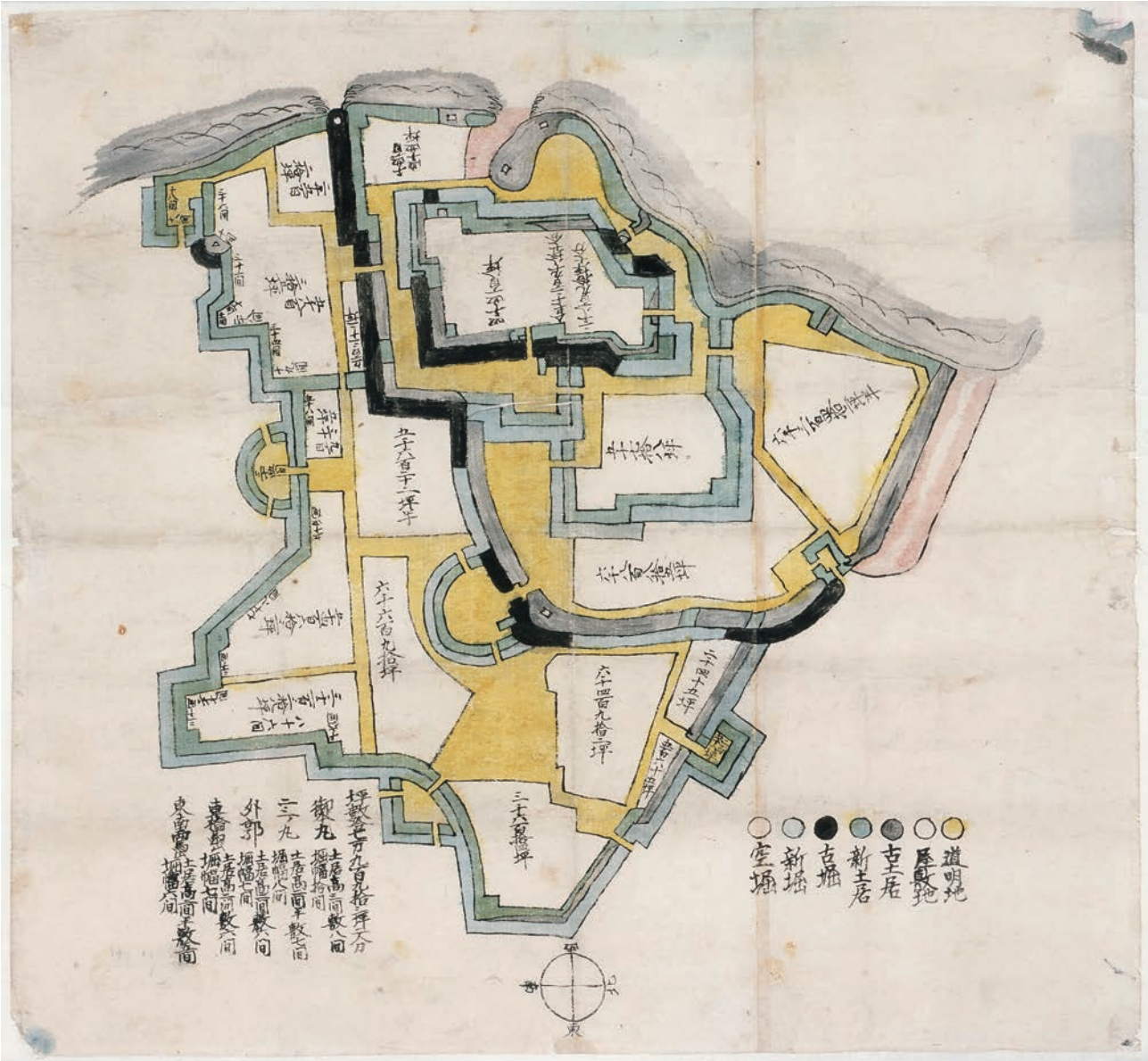
26. 松平家前在城当時前橋城図（k222136-8）77.5×105

27. 前橋城侍屋敷図（k222140）83.5×115.5

28. 前橋城御築城地割図（k222154）105×85

(3) 再築前橋城絵図

29. 前橋城周辺地図（k222397）74×75.7



30. 再築前橋城絵図（k222136-1）42.5×45

31. 再築前橋城絵図（k222136-3）136×77.5

32. 再築前橋城図（k222152）147×127

3．書き写された城絵図

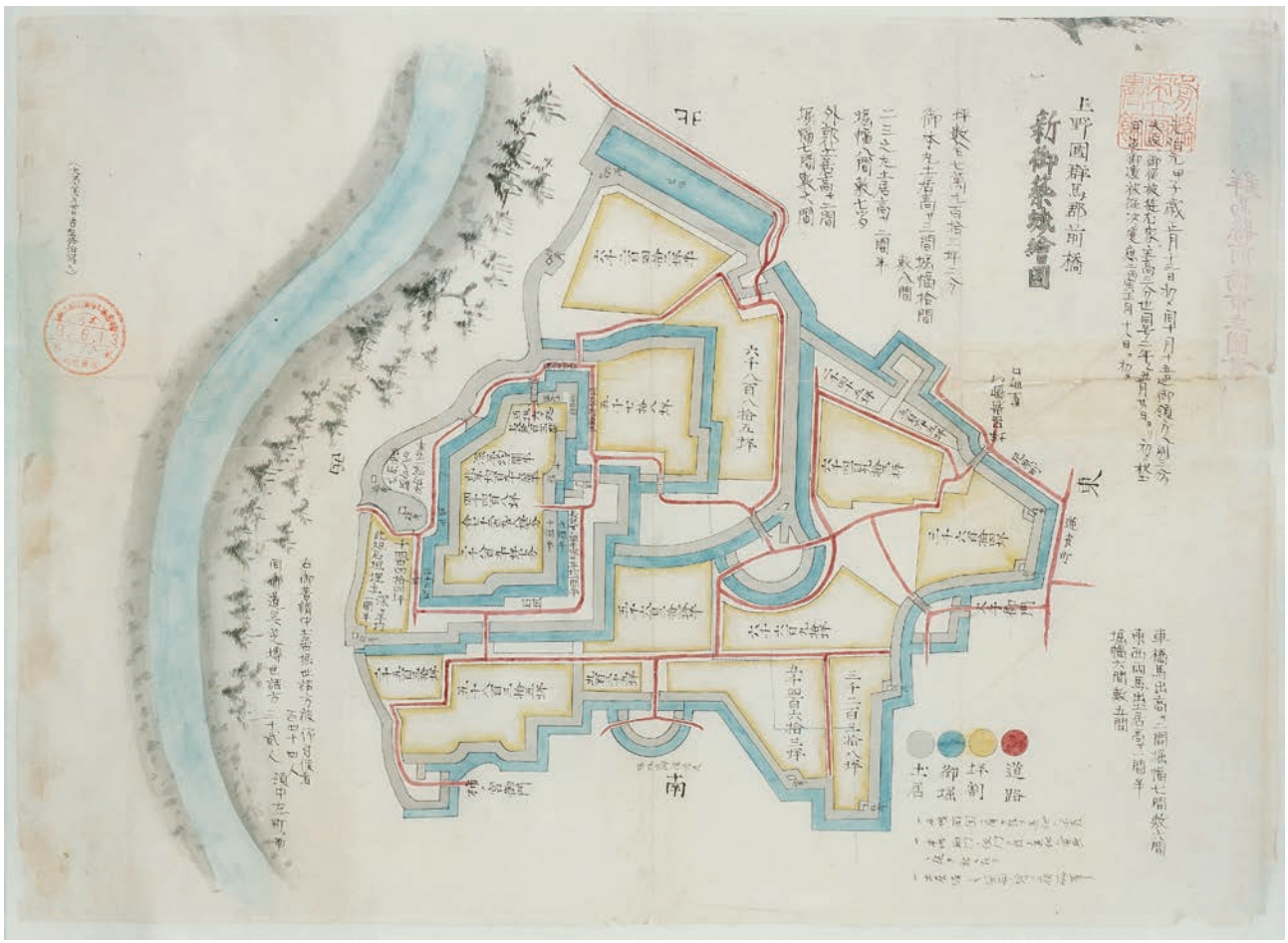
(1) 昭和初年に前橋図書館により書き写された城絵図

33. 前橋城絵図（k222136-10）83.5×59.5

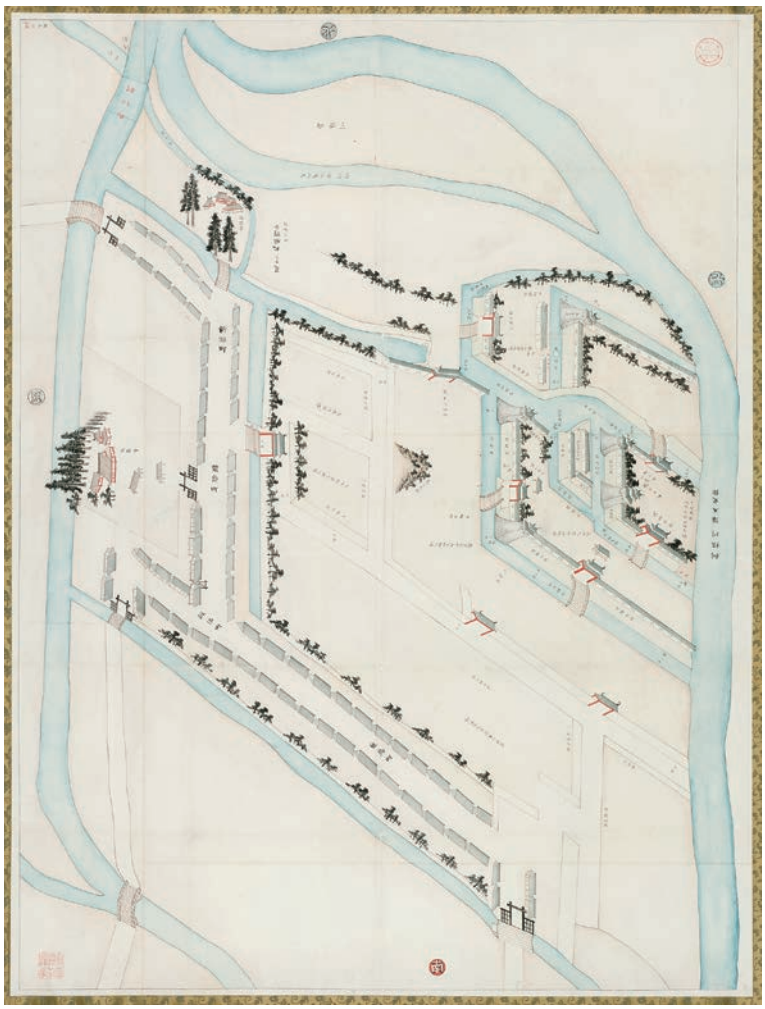
34. 前橋城図（k222136-6）122.5×113.5

35. 前橋城住屋敷図（k222136-12）128×102.5

36. 前橋城再築計劃図（k222155）112×92.5

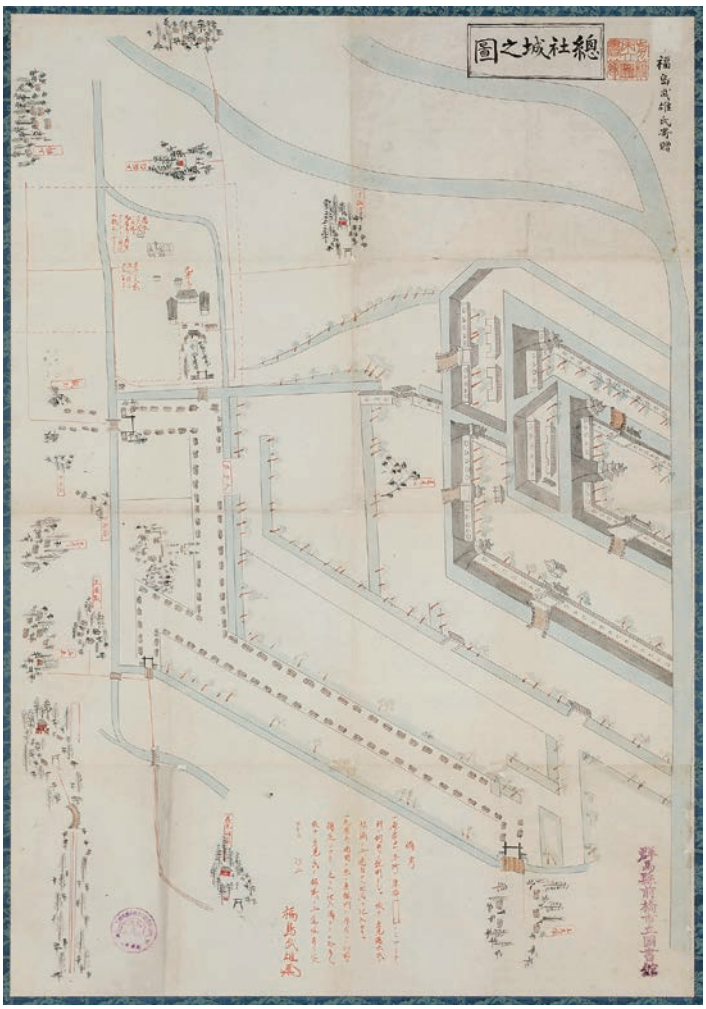


37. 上野国群馬郡前橋新御築城絵図（k222136-2）44×59.2

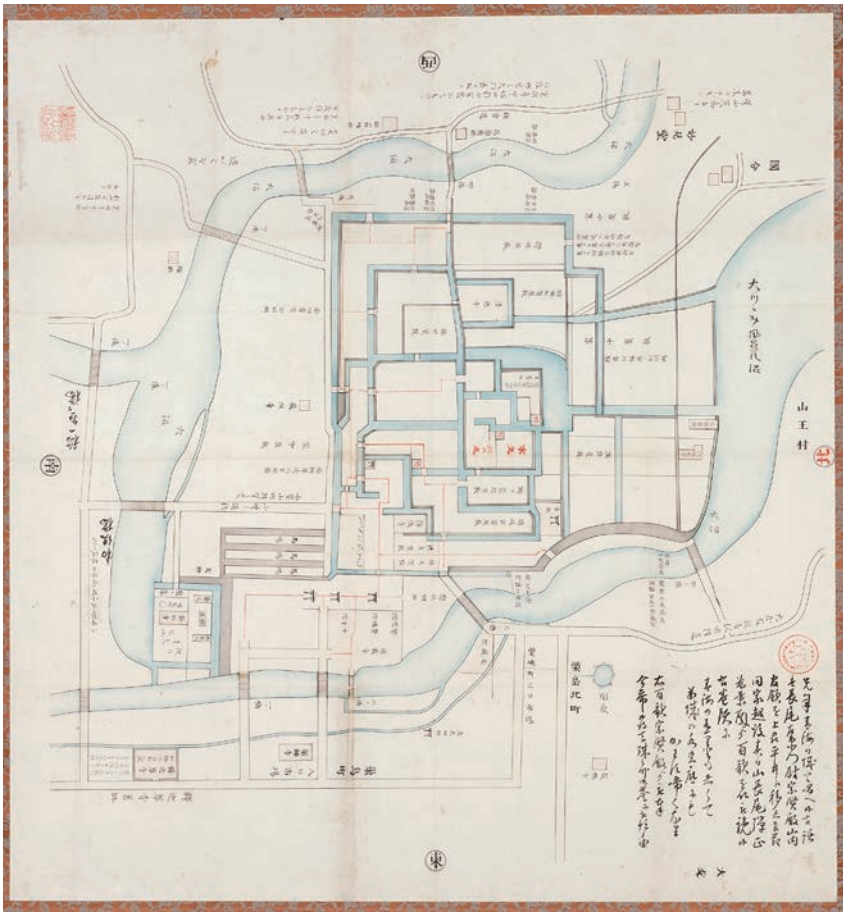


38. 総社城図（k222395）126.6×96

40. 厩橋城絵図（k222156）36.5×157

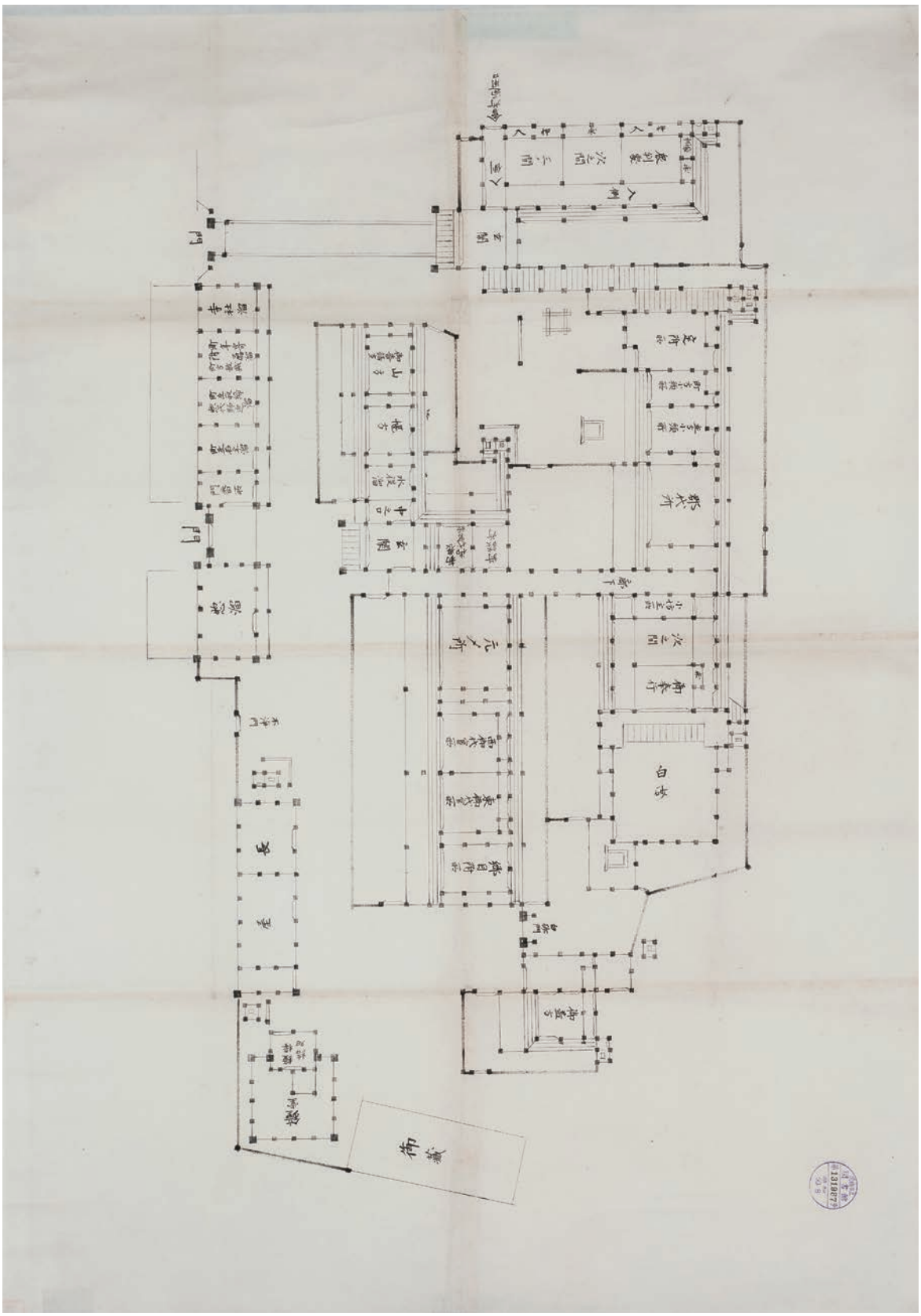


39. 総社城之図（k222394）78×54.5



41. 蒼海城図（k222393）81.5×76

42. 前橋城周辺地図（K 222398）157.5×108.2



43. 前橋城陣屋之図（k222-86）105×75.7

(2) 前橋市史編纂事業で書き写された前橋城絵図

44. 前橋城絵図（参考）204×198

45. 前橋城絵図（酒井２）271×245

解説

1. 酒井雅楽頭家の城絵図

(1) 現存する最古の前橋城絵図

1. 前橋城絵図（酒井1―9）206×205

現存する前橋城絵図の中で最も古い絵図である。地図の右下には、図上の彩色の凡例が記載されている（1―3）。

此印東西五百八拾七間　内川原五拾四間
此印南北五百六拾三間
壱分壱間但壱間ハ六尺間
小路ハ朱
御土居ハろくせう（緑青）
御堀はあいろう（藍色）
屋敷境　す三筋

水路・濠の藍色、道が朱色、土塁の緑と白壁が鮮明に描かれている。また、図中に、朱の丸印、朱の丸点を記すことにより東西、南北の距離を間数で示している。

絵図には、城内の門や櫓、橋などの主な構造物も鮮明に描写されている。また、曲輪内には、家臣の氏名と屋敷割、屋敷の坪数が記載されている。

利根川沿いに南北に連なる高浜丸、本丸、二の丸、御厩曲輪には本丸の三階櫓と五基の隅櫓が描かれているが、本丸から続く隅櫓は描かれていない。また、車橋門脇の櫓が描かれていない。

1―1は高浜丸の北に貼られた別紙による付箋。「従先年酉八月十四日迄ここを欠く」と書かれ、「この間、四拾九間」と墨書されている。

1―2は付箋（1―1）の下の部分。浸食される前の道や堀などが描かれている。

1―3は絵図右下の凡例部分

1―4は城南端部の下条曲輪。「下条曲輪　御塩焙蔵」とある。ここは、後に冷泉院曲輪と呼ばれるようになる。

1―5は本丸周辺。三階櫓の本丸が描かれ利根川に沿って、櫓が描かれている。ただ、本丸から続く櫓は描かれていない。

1―6は二の門、三の門周辺。それぞれ、馬出、枡形を備えた長屋門が描かれている。

1―7は車橋門。巨大な長屋門が描かれている。北側の折れにはまだ、櫓が描かれていない。

1―8は大手門周辺。車橋門と同様な巨大な長屋門で、描かれている。また、東側に小さく「大手口」と記された小さな門が描かれている。大手門口には最初冠木門があったと『直泰夜話』にはある。

(2) 城普請に係る絵図

2. 前橋城絵図（酒井1―1）130・5×132・5

絵図の右下には

前橋城今度土手所々崩候并土手之土堀江
流候儀　本丸西之方櫓壱ヶ所外曲輪櫓壱ヶ所
新規ニ立申度覚
一　本丸土手八ヶ所崩申候事
一　二丸土手弐拾壱ヶ所崩申候　内五ヶ所門脇土手尓而御座候事
一　三丸土手拾四ヶ所崩申候　内五カ所者門脇土□□御座候事
一　外曲輪土手五拾六ヶ所崩申候　内八ヶ所者門脇土手ニ而御座候事
都合土手九拾九ヶ所崩申候
一　二丸水敲土手五ヶ所　三丸水敲土手七ヶ所外曲
輪水敲土手三拾弐ヶ所合四拾四ヶ所崩申候事
一　崩候所之土手之土堀江落候間　浚申度事

一　本丸西之方櫓壱ヶ所外曲輪巽之方櫓壱ヶ
　所以上二ヶ所新規ニ立申度事
右之通以連々普請仕度奉存候御奉出申請度候　以上
寛文六年年九月十六日　　酒井雅楽頭

とあり、酒井家文書「寛文六年十月四日付け老中連署奉書（文書番号０３２―０４８）」の内容と一致することから、この奉書に係る城普請の手控え及び添付図面の控と思われる。しかし、図面の稚拙さや、文字の筆致の弱さなどから判断して、写本と考えられる。本絵図には、七カ所の櫓が描かれており、おそらく、現存しない元本には、新規建設予定の櫓と、既存の櫓には明瞭な表記の違いがあったことが、想像できる。

3．前橋城絵図（酒井1―2）５６×７０

絵図の左下隅に

前橋城今度土手崩候　并堀埋申候覚
一　本丸土手二ヶ所崩申候所朱星仕注間敷候
一　外曲輪門脇石垣一ヶ所崩申所朱星仕注間敷候
一　同堀三ヶ所埋申候所朱星仕候
右之通以連々普請仕度奉存候以上
延寳四辰年九月十九日　　酒井雅楽頭

とあり、酒井家文書の「延宝四辰年九月二三日付け　城普請之奉書老中連署奉書（文書番号０３２―０５０）」の内容と一致することから、城普請に係る申請書の控と考えられる。

4．前橋城絵図（酒井1―10）９４×８５

絵図の右下に

此朱筋之通　用水為掘申度奉存候以上
貞享四卯年八月十三日　　酒井河内守

とあり、図面には、柏木門前の堀から嶋田曲輪を抜け伯耆曲輪から大手門に抜ける線と、三の曲輪北の堀から三の曲輪を通り下条曲輪柿ノ宮門へ抜ける線が新たに用水新設を行う予定線として、朱線で描かれている。朱筋の終点には新規堀の仕様が記されている。

此朱筋之通長サ五百四拾三間但西之方之横筋并橋之樋井ニ廣サ弐尺五寸ゟ壱尺五寸迄深サ弐尺五寸ゟ三尺迄土留野つら石橋之樋者四寸四方

とある。

この申請に係る許可書の老中奉書は今のところ確認されていない。

5．前橋城絵図（酒井1―13―1）１１１×９４

絵図の右下隅に前橋城と書かれている。その他に文字の記載は無い。絵図全体の構図は、４図（酒井１―10）に似る。城の北に描かれている広瀬川の描き方や風呂川の描き方、さらには風呂川の脇には風呂川から分かれた支流が描かれている。門や櫓、塀などの構造物は、詳細に描かれている。また、車橋門前や柳原門、坪呂岩門の間の堀の中央には朱線が引かれている。

(3)　利根川の瀬替えに係る絵図

6．名倉八兵衛見分之新堀絵図（酒井1―5）１２１×２３９

蛇行して流下する利根川のもっとも大きく蛇行した部分を中央として描かれる。本城部分は崖線が描かれ、堀のみ鼠色の別紙が貼られ「堀」と墨書されている。門、櫓などの構造物は一切描かれていない。利根川が最も大きく蛇行した川の流路を直線とする新川の計画線も鼠色の別紙で表現され、その上に「新川見立之場　長弐百五拾間　横三拾間」と墨書されている。左岸側、大渡船場と墨書された上下流には制水構造物にあたる「かこたし」、「わく籠出し」などが、五箇所、茶の色紙が貼られた上に墨書されている。

また、付箋で、

此出し当分ハ五所ニ仕候得共御普請　仕懸り候ハバ段々相ふやし　出シ数多仕候儀可有御座由申候　長幅之儀者御普請仕不懸候ヘハ相知不申候由申候

とある。右岸側には、崖線が描かれ、その上に茶色の別紙が貼られ、

道よりかけ際迄検地之場所　惣社領田畑　長　三百拾八間　横　六拾間但
出入□　此惣坪　壱万九千坪　内四千八百九拾坪　田　壱万四千百拾坪
畑

と墨書されている。また、茶の紙の西側にはやや、淡い茶色で、道が描かれ、道の西側には「高崎領」と墨書がある。

当初、本絵図の表題を確認することができなかったが、裏打ち紙の下に確認することができた。

6―1は裏打ち紙を通して確認できた絵図の表題「名倉八兵衛見分之新堀絵図」を確認することができる。

6―2は新堀部分。灰色の別紙で、新川計画線が示されている。その上に「新川見立之場　長弐百五拾間横三拾間」とある。

6―3は蛇行部の上流側、新川の計画の上流に描かれた「かごだし」「わく籠だし」の表記である。茶の別紙が貼られ、その上に墨書がある。

6―4は蛇行部の対岸。旧総社秋元領で、寛永一〇年（1663）に秋元氏が甲斐谷村への転封に伴って廃藩。後に高崎領となる。

7．前橋城絵図（酒井1―13―3）177×152

全体に淡い褐色の色調で、道路部分はやや黄色味が強く、橙に近い著色が施されている。描写されている範囲は利根川大渡の渡しから下流、下条曲輪までである。虎ヶ渕を大きく浸食する利根川を描いている。風呂川と利根川とが最も近づく箇所には蛇籠が描かれている。また、利根川の対岸には、旧総社領の崖線が描かれ、虎ヶ渕の対岸の崖線下には、薄い線で、蛇行部を直線とする新川の計画線と思われる記載が認められる。城の内部の構造物は詳細に描かれ、門の名称、曲輪名などが墨書されている。また、付箋で、利根川までの間数等が記されている。

蛇行により、虎ヶ渕を大きく浸食している利根川の流路を変更するための計画図面と推定される。

風呂川と分岐する用水が描かれており、貞享年間の城絵図と似ているが、本図は利根川の虎ヶ渕への浸食がより大きく描かれている。

8．前橋城絵図（酒井1―12―1）129×133・5

前橋城を中心として、大きく蛇行し、虎ヶ渕を浸食する利根川を描いている。また、蛇行部を直線で結ぶ新川の計画線が城の上流部の蛇行部に記入されている。

城中心部の描き方は、堀、水路は藍色、道は橙、土塁は緑、土塁上の土塀は黒と白で著食されている。城内の構造物は、詳細に描かれている。

文字は、各曲輪名、侍屋敷の記載のみである。城の北を流れる風呂川は一本のみ広瀬川に沿って描かれている。

9．前橋城図（酒井1―12―2）119・5×118

全体の構図は、8図と同じである。8図で、虎ヶ渕の蛇行部に引かれていた、新川の計画線上に新川と墨書されている。また、新たに下流側で、下条曲輪、冷泉院曲輪を浸食している利根川の蛇行部に、新川の計画線が記入されている。虎ヶ渕の浸食された崖線、二の曲輪の北西隅櫓、冷泉院曲輪の崖線には朱線が引かれ、それぞれ、墨書が施されている。虎ヶ渕崖線には

此所五六十年以来段々闕入申候侍屋敷十弐間　寺弐箇寺闕落只今者河原ニ相成候

二の曲輪北西隅櫓跡には、

此櫓櫓下切崩年々闕入櫓傾危相見申候付寳永三年奉願櫓畳候而櫓下長拾五

間高七尺石垣仕差置度地形落付候時分櫓如元建申度由申上候処願之通被仰出候其節櫓下石垣ニ申付置候未櫓者建不申候

とある。

10．前橋城（酒井1―13―2）81・5×83

櫓、門などの構造物は、描かれることなく色彩のみで凡例で示されている。広瀬川は描かれていない。虎ヶ渕を浸食していた利根川の本流を西側に瀬替えすることに成功するが、高浜曲輪へ、直接支流が当たるようになっている。高浜曲輪の北西隅の櫓は櫓台も浸食され消滅している。

11．前橋城（酒井1―12―3）117×117

櫓、門などの構造物は、詳細に描写されている。曲輪内は侍屋敷との記載がある。利根川の本流が、高浜曲輪を直接浸食し、曲輪の一部が崩落している。

(4) 城下絵図及び上野国絵図他

12．前橋侍屋敷之図（酒井1―3）93×133

旧大胡城の城下を描いている。大胡城は元和二年（1616）に、城主であった牧野氏の越後転封により前橋藩の藩領に組み入れられ、重臣高須隼人に預けられたという。本絵図には、城内の建物は石垣等を除いて、既に無く、元禄一三年（1700）に第五代藩主忠挙によって設置された藩校「求知堂」が記されていることから、元禄一三年以降の絵図と考えられる。堀、水路は藍色、道は橙色、土塀は緑、土塁は茶で着色されている。また、寺院名、家臣名と居宅の坪数などが墨書されている。

12―1は大胡古城周辺。既に建物は無く、石垣のみ描かれている。大胡城の建物は、忠挙の代に取り壊され、前橋城の一部に再利用されたとある。

12―2は藩校「求知堂」の記載がある。

12―3は養林寺の南西部分。家臣の氏名と屋敷割、坪数が記入されている。また、長屋と表記された長方形の建物が三棟たっていることが確認できる。

13．前橋外曲輪御絵図（酒井1―4）105×152

昭和五五年の前橋市文化財保護課の調査では、「天和四年子□二月七日」という墨書があったというが、現在は確認できない。本城は輪郭のみ描かれ、大きく蛇行する利根川は淡い藍色で表現されている。城外の城下町は橙色で著色され、町割り、道路、寺院、城外に住まう武家の氏名などが記載されている。また、札の辻、町年寄、御大工などの墨書による記載が認められる。本城の形、二本ある風呂川などから、比較的古い城を描いていると思われ、4図の貞享の城絵図に近く、天和の年号があったということにも肯首できる。

13―1は大渡の渡し周辺。向井町を抜けて、十五軒町を抜け大渡の御番所などが描かれている。その先に大渡の渡し場が描かれている。

13―2は龍海院及び長昌寺周辺。前橋城の南に位置する長昌寺。その西側、利根川に接して、正淳寺が描かれている。正淳寺は寺伝によれば、初め、浄妙寺といい、寛永二年（1625）に前橋に移り、貞享三年（1686）正淳寺と改称、享保一七年（1732）利根川の洪水により境内流失翌年榎町に移ったとある。寺伝と寺の改名時期が異なるが概ね当該時期に該当しよう。

13―3は大手門周辺。城内は白抜きで堀のみで表現されている。「町年寄」「御札辻」などの記載がある。

13―4は現在も三河町一丁目に残る正幸寺や養行寺・隆興寺周辺。この周辺の道路や水路は現在でもほとんど変わらない。図の右上には広瀬川から分かれた端気川が描かれている。

13―5は現在の文京町三丁目四丁目、天川町付近。天川二子山古墳が描かれ、広瀬川から分水された端気川とさらに分水した棚島用水が描かれている。

13―6は、天川町から南町、六供町を経て真正の渡し場までの道筋を描いているが、途中、道が直線になる部分に「東道」の記載がある。

14．上野国絵図（酒井1―8）366×574

渋川、沼田以北、高崎・玉村地域の一部を欠くが、上野国絵図である。道路は朱、河川は黒、山岳は緑と茶と鼠色、社寺を朱と茶でそれぞれ彩色して表現し、利根川の渡船場には、利根川上に船を描くなど、克明に記している。また、俵型に村名と石高を記入し、郡毎に色分けされると共に郡毎の総石数を短

冊形に色分けして記入している。今後、詳細な検討が必要となるが、現段階では、『酒井家資料』等の記載記事による寛文四年（１６６４）の、幕府より前橋藩主酒井雅楽頭忠清と高崎藩主安藤対馬守重博が作成を命じられたとされる上野国絵図に関係する絵図の下絵図と考えられる。

14―1は前橋城周辺。城の東に八幡宮、北には龍蔵寺の建物が描かれている。勢多郡の村々が灰色に著色された小判形に石高、村名が記入されている。図の右上には勢多郡の総石高が四角形の枠に記入されている。

14―2は伊勢崎周辺の部分図。伊勢崎藩は酒井忠清の弟忠能が寛永一四年（１６３７）二万二千五百石で前橋より分封され成立するが、寛文二年（１６６２）に信州小諸に転封され、元和元年（１６８１）忠挙の襲封の時弟忠寛により再び伊勢崎藩となるまで、前橋領となる。

14―3は大胡城周辺と三夜沢赤城神社周辺部分図。大胡城は大胡古城となっている。三夜沢赤城神社には東西二つの神社が描かれている。

14―4は伊勢崎玉村町周辺部分図。利根川の本流は「五料の渡し」の下流で烏川と合流している。また、広瀬川との合流点は「平塚の渡し」のすぐ上流となっている。利根川と烏川の合流より下流では、利根川が本流と支流二本描かれている。

15. **前橋領図**（酒井1―7―1）１７９×１２４

16. **前橋領図**（酒井1―7―2）１７８×１２０・５

17. **前橋領図**（酒井1―7―3）１６８・５×１１５

利根川を中心として、前橋、高崎、北は沼田、南は藤岡まで描き、村々を俵型に表し、藩領ごとに色分けをしている。山岳は緑と鼠色、河川は藍色、道は朱で描かれ、地名が墨書されている。また、神社は朱と茶色で鳥居等が描かれている。ほぼ同じ図幅のものが三枚ある。15図には、上泉村の東に堤村が書かれているが、16・17図には書かれていないなどの差異がある。17図は、本紙が新しく、絵も稚拙であることから、複製とも考えられる。

18. **対馬守御陣屋絵図**（酒井1―14）１２７×１３８

高崎藩主安藤対馬守家の陣屋絵図で、播州室津（兵庫県たつの市室津）と推定される。酒井家に伝世された資料で、安藤対馬守家とは、寛文四年（１６６４）の上野国絵図作成に際して幕命で、共同で事業に当たっている。

19. **前橋城図**（k222136―4）８４・５×６０

元禄四年（１６９１）に設置された藩校好古堂や三の曲輪に新御殿の記載がある。また、高浜曲輪を酒井弾正明屋敷と表記していることから、弾正家が絶家となる享保七年（１７２３）以降の前橋城の様子を描いているものと推測されるが、利根川の流路等の表現は、これまでの酒井家絵図とは異なる。城内には曲輪名、家臣名が記載されている。大正八年六月の市立図書館の朱印が押されており、前橋図書館の収集品と考えられる。個人所有の天保一二年（１８４１）の記年を持つ絵図（46図）や20図に似る。

20. **前橋城図**（k222136―7）１０４・５×８０

酒井氏時代の絵図の写本である。三ノ曲輪に新御殿が設置され、藩校好古堂が描かれていることから元禄四年以降の城の状況を描いた絵図である。19図とよく似る。「前橋城図」「本図約二百五十年前」の文字は後からの書き入れと思われる。前橋市史第二巻三三〇頁の正幸寺所有の前橋城絵図にもよく似ている。19図と同様に前橋図書館の収集品と考えられる。

2. 松平大和守時代の城絵図

(1) 前橋入府時の前橋城絵図

21. **前橋城絵図**　７２×５１・５

前橋市史六巻の巻頭図版になっている絵図で、坪呂岩門の前に大きな岩、坪呂岩を描いている。朱と墨の濃淡で描かれ、城の主要な構造物には朱墨が入れられている。曲輪名、小路名、家臣名が墨書されている。本丸には、古御本丸、新御本丸の墨書があり、三の丸に本丸を移した寛延四年（１７５１）以降の状況と考えられる。西端には、「文政二巳卯年九月十五日写之　上野国□□郡前橋御城大田氏縄張之」と墨書されている。また、南隅には、「上野国勢多

郡上泉村難波小□平　求」とある。

22. 前橋城絵図（k222136―9）69×66・5

水路は淡い藍色、土手は緑、道は黄色、侍屋敷は茶色、堀は淡い草色として着色されている。利根川の流路、城の西側の櫓などから酒井家の時代の前橋城を描いている。

23. 前橋城絵図部分（k222136―5）34×67・5

寛延二年姫路より前橋江転封砌之絵図　「布施」の朱印

24. 前橋城絵図部分（k222136―11）33×67・3

明和五年川越城地拝領引移時分之絵図　「布施」の朱印

22～24図は、色使い、構造物の表現、文字の特徴などから、同一の作者による絵図と考えられる。

(2) 川越移城の頃の前橋城絵図

25. 前橋城絵図（k222136―13）114×104

利根川本流は、高浜曲輪に直接突き当たり、本丸直下を舐める様に、浸食している。

城内部の構造物は詳細に描かれている。堀・水路は薄い藍、道を黄色、土塁は緑、土塀は白で着色されている。城内外には、住まいの地割りと家臣名が墨書されている。家臣名は松平大和守家のものであり、松平家が、姫路から前橋に入府直後の状況を描いたものと思われる。

26. 松平家前在城当時前橋城図（k222136―8）77・5×105

25図と構図、記載された内容は同じものである。図書館の台帳では明治四四年一月松田善二郎調整とある。前橋市立図書課職員名簿には松田の名前は無い。25図、27図とともに図書館による写本とも考えられる。

27. 前橋城侍屋敷図（k222140）83・5×115・5

25図と同じ構図で、記載された内容も同じである。本図も図書館の写本とも考えられるが、明確ではない。

28. 前橋城御築城地割図（k222154）105×85

再築前橋城の建設前の前橋城下の様子を描いている。東は、現在の天川原町周辺まで、北は昭和町周辺まで広く描いている。「約五十年前」と表題とともに記入されており、大正期に描かれたものとも考えられる。

(3) 再築前橋城絵図

29. 前橋城周辺地図（k222397）74×75・7

再築前橋城整備後の城内の坪数及び城下町の家臣名及びその配置を記している。前橋図書館の朱印が押されている。前橋城を挟んで利根川の上流側に虎ヶ淵、下流側に龍ヶ鼻の記載がある。

30. 再築前橋城絵図（k222136―1）42・5×45

再築前橋城図である。道、明地を山吹色、新旧の堀を藍色の濃淡、新旧の土塁を墨の濃淡等で描き、それぞれの曲輪の坪数が記載されている。総坪数七万九百九拾三坪二分とある。

31. 再築前橋城絵図（k222136―3）136×77・5

大正八年六月の市立図書館の朱印が押されている。城内及び城外の家臣名と屋敷割が書かれている。前橋城を挟んで、利根川の上流側に虎ケ渕、下流側に龍ケ鼻と朱書きされている。

32. 再築前橋城図（k222152）147×127

道を山吹色、堀を藍色の濃淡、旧土塁を朱色で表現している。曲輪の坪数を記載している。

総坪数七万千百十七坪二分とある。中村金三郎寄贈とある。

3．書き写された城絵図

(1) 昭和初年に前橋図書館により書き写された城絵図

33．前橋城絵図（k222136―10）83・5×59・5

3図の延宝四年の紀年を持つ絵図の写しである。図左下に、大正九年八月七日に酒井伯爵家の原本から佐野八蔵が写した旨が、前橋図書館司書　山田豊蔵により記されている。山田は図書館職員録によれば、大正六年から大正一〇年まで、前橋市立図書館に在籍している。

34．前橋城図（k222136―6）122・5×113・5

9図を模写している。33図と同様に、右下隅に、図書館司書山田豊蔵により、大正九年八月七日　佐野八蔵をして謄写したとある。33図と同じ日付である。

35．前橋城住屋敷図（k222136―12）128×102・5

25図と同じ構図である。松平大和守家が前橋に入府して間もない頃の前橋城を描いているものと思われる。「大正六年九月　源　龍夫寫」とある。

36．前橋城再築計劃図（k222155）112×92・5

再築前の前橋城の地割りに、再築前橋城の計画線が朱書きで記されている。右隅には大正一二年から昭和一五年まで、前橋図書館に在籍し、館長を務めた佐藤雲外こと佐藤錠太郎が、宮澤熊五郎の書き記した図を模写した旨が記されている。原本の所在が不明であるが、前橋城と再築前橋城の地割りの違いがよくわかる資料である。

37．上野国群馬郡前橋新御築城絵図（k222136―2）44×59・2

再築前橋城図である。それぞれ、曲輪の坪数が記されている。左上に「大正七年一月三〇日吉野修治写ス」とある。吉野修次は大正五年から大正八年まで、前橋市立図書館職員であった。大正八年六月一三日付け前橋図書館の日付印が押されている。

38．総社城図（k222395）126・6×96

秋元長朝により築城された総社城の絵図である。大正八年六月一三日付け前橋図書館の日付印が押されている。「龍夫写」と記入されている。34図と同じ源龍夫であろう。

39．総社城之図（k222394）78×54・5

38図と同様に総社城図である。福島武雄寄贈とある。福島は総社山王の山王廃寺塔跡の調査や高崎市保渡田古墳群の調査などで、著名な地元総社の郷土史家であり考古学者である。図中央下には福島本人による朱書きが残されている。大正九年四月一五日付け前橋図書館の日付印が押されている。

40．厩橋城絵図（k222156）36・5×157

真之丸馬出と正面上に記載された門の平面図と寛延前後の前橋城絵図の本城付近のみの絵図が並列して表装されている。前橋図書館の朱印が押されている。図書館の収集品とも考えられる。

41．蒼海城図（k222393）81・5×76

元総社町にあった蒼海城（総社城）の城絵図の写本である。大正八年六月一三日付けの前橋図書館の日付印が押されている。図書館の収蔵品とも考えられる

42．前橋城周辺地図（K222398）157・5×108・2

13図の前橋外曲輪御絵図と同構図、同内容である。早い段階での写しの可能性もある。前橋市市史三巻には、この図が使われている。明確に前橋図書館の模写とは断定できない。

43．前橋城陣屋之図（k222―86）105×75・7

寛延三年に設置された郡代所、前橋陣屋の建物平面図と思われる。昭和五〇

年八月付けの前橋図書館の日付印が押されている。柱間や部屋名等が記されている。

(2) 前橋市史編纂事業で書き写された前橋城絵図

44. 前橋城絵図（参考）２０４×１９８

現在、龍海院所有で、群馬県立文書館が寄託管理している前橋城絵図である。

45. 前橋城絵図（酒井2）２７１×２４５

44図の龍海院所有、群馬県立文書館寄託の前橋城絵図の写しと考えられる。前橋市市史編纂室と箱書きがあり、市史編纂に合わせて複製を作成した可能性があるが、詳細は不明である。文字のかすれや、不明な箇所についても克明に模写されているが、一部の家臣名に違いが認められる。故意の間違いか、あるいは同種の地図がもう一枚存在するのか不明である。

4．前橋城絵図の意義

前橋城は、ある意味幻の城である。中世後期に長野氏によって築城され、天正一八年（１５９０）に平岩親吉が入府することで、近世城郭として整備され、慶長六年（１６０１）、平岩に替わって酒井雅楽頭重忠が前橋城に入ったことにより、以後、一五〇年間は酒井雅楽頭家の城となる。しかし、寛延二年（１７４９）、酒井家は姫路に転封、替わって前橋に入った松平大和守朝矩は、利根川の浸食に耐えられず、川越に移城してしまう。この移城により、明和六年（１７６９）には、この時まで残っていた前橋城の三階櫓天守を含む建物や構造物がすべて破却されることになるのである。利根川の洪水により城地を削られながら耐えてきたもっとも城らしい近世前期の前橋城は、その姿を消す。

その後、幕末に再築前橋城が整備されるが、その構造は、酒井の城と比べ全く異なるものとなっている。これは図書館が収集してきた再築前橋城絵図群で知ることができる。

今回、はじめてその全貌を公表することとなった酒井雅楽頭家に伝世されたことが明らかな前橋城絵図群は、江戸時代前期の最も華やかな時代の前橋城を知ることのできる唯一の資料群である。また、前橋城が西側を流下する利根川の浸食により度々城地を削られていくその過程や、その利根川の浸食を瀬替えにより克服しようとする酒井家の動きもこの絵図によって知ることができる。

そして、さらには、城絵図とともに保管されていた上野国絵図は、昭和五二年の前橋市による調査では、現在、群馬県立文書館で所有する群馬県指定重要文化財『元禄上野国絵図』の写本と考えられていたが、今回の再調査により、これまで知られていなかった寛文四年（１６６４）に第四代藩主酒井忠清が高崎藩主安藤対馬守重博とともに幕府から作成を命じられた上野国絵図の下図であることが明らかになりつつある。まさに、江戸時代前期の幕府中枢で活躍した酒井雅楽頭家の城、業績を窺い知ることのできる好資料として評価できる絵図群となった。

(1) 最古の前橋城絵図

1図は、現存する前橋城絵図の中で、最も古い時期の前橋城を描いているものである。

本図は、現存する前橋城絵図の中では、龍海院所有県立文書館寄託の前橋城絵図44図と並んで、城内の建物群、家臣名が詳細に描かれた資料である。特に、城内の構造物は克明に表現されている。しかし、1図には、本丸から西側に続く櫓と車橋門脇の櫓が描かれていない。これは、2図にある寛文六年（１６６６）九月十六日付け但し書きや酒井家文書「寛文六年十月四日付け老中奉書」に書かれた内容以前の状態を示していると言える。すなわち、「本丸西之方櫓壱ヶ所外曲輪櫓壱ヶ所新規ニ立申度覚」による、「一、本丸西之方櫓壱ヶ所外曲輪巽之方櫓壱ヶ所以上二ヶ所新規立申度事」の申請時の状況を示しているといえる。また、『直泰夜話』には、寛文六年に下条曲輪に塩焔蔵を置いたことが記されていることから寛文六年以前あるいは、寛文六年に限りなく近い時期の前橋城の状況を示しているともいえよう。さらに、左上高浜曲輪の北に後補された付箋に表記された「酉の八月十四日」は、寛文九年（１６６９）に該当すると考えられ、これは、寛文一〇年、一一年の『酒井家文書№０３６―１３３、０３２―０８４』などの忠清書状による虎ヶ渕の普請に関わる記事と対応することが推定できる。また、付箋の貼られた箇所の下に描かれている絵図の表記と龍海院絵図（44・45図）のそれとでは、明らかに、利根川により浸食を受ける前の状況と受けた後の状況を表現していることを確認することができる。以上のことから、本図を最古の絵図として位置づけ、本図が最初に描かれたのは限りなく寛文六年に近い時期とした。

なお、龍海院所蔵前橋城絵図（44図）は三の丸の東に屋敷を持つ「内藤半左衛門」（代々、半左衛門を襲名）が「内藤久米之助」となっている。酒井家記録の延宝八年（１６８０）に内藤半左衛門の倅久米之助に本地安堵とあることからこの記事前後の時期と考えられる。

(2) 酒井雅楽頭家による利根川の瀬替え

6図から9図は利根川の瀬替えの状況を表している。特に6図は、「名倉八兵衛見分之新堀絵図」という表題が確認できることから、瀬替えを明確に意図した図面である。7図も同様の意図が窺える図面であるが、新堀の位置が異なっている。酒井家記録には元禄一五年（１７０２）一二月二一日に「利根川

46. 天保絵図（個人蔵）

の西に堀割を直して云々」とあり、6図、あるいは7図にこの記事が該当すると思われる。

また、宝永七年（1710）には「利根川転流につき地替え」、正徳二年（1713）には「新川を開堀す」とあることから、元禄一五年、宝永七年の記事に該当するのが7図、正徳二年の記事は6図が該当するのではないかと考えられる。7図は利根川の西、他領である総社領にある旧河道の堀割を表現している。一方、6図は、旧河道とは別に、河原に新たに堀を掘って新川とする計画であることがわかる。酒井家は、利根川により削られる城地を食い止めるため、利根川の西にある旧河道を改修して西側への瀬替えを画するが、他領であるため、領地替えも辞せずとするが認められず、結局、ショートカットによる瀬替えに踏み切ったのではないかということが推察できる資料である。なお、9図に見るようにその後も下流側に新堀を計画していることもわかる資料である。

酒井家は、城地を削り続ける利根川に果敢に挑むも、ショートカットによる瀬替えが裏目に出てついには、高浜曲輪に直接利根川の本流がぶつかるようになり、城地の河川浸食が更に進む結果となってしまった。これを契機として、前橋から姫路への転封の機運を高めることにもなるのである。

(3) 寛文の上野国絵図、前橋藩領分図

寛文の上野国絵図（14図）、前橋藩領分図（15～17図）は酒井雅楽頭家に伝世された絵図群で、今回の指定にかかる調査において新たに再確認された資料である。

寛文郷帳の存在や徳川実紀、酒井家資料などの記述から寛文四年に前橋藩酒井雅楽頭家と高崎藩安藤対馬守家は、幕府から上野国絵図の作成を命じられたことが知れるが、その図はこれまで所在不明とされてきた。しかし、今回、本絵図帳に掲載した14図は、この寛文の上野国絵図の下図であることが、群馬県立文書館との調査で明らかになりつつある。今回の絵図群調査の中では、最大の発見となった。調査はまだ途上であり、今後の詳細な調査に委ねたい。

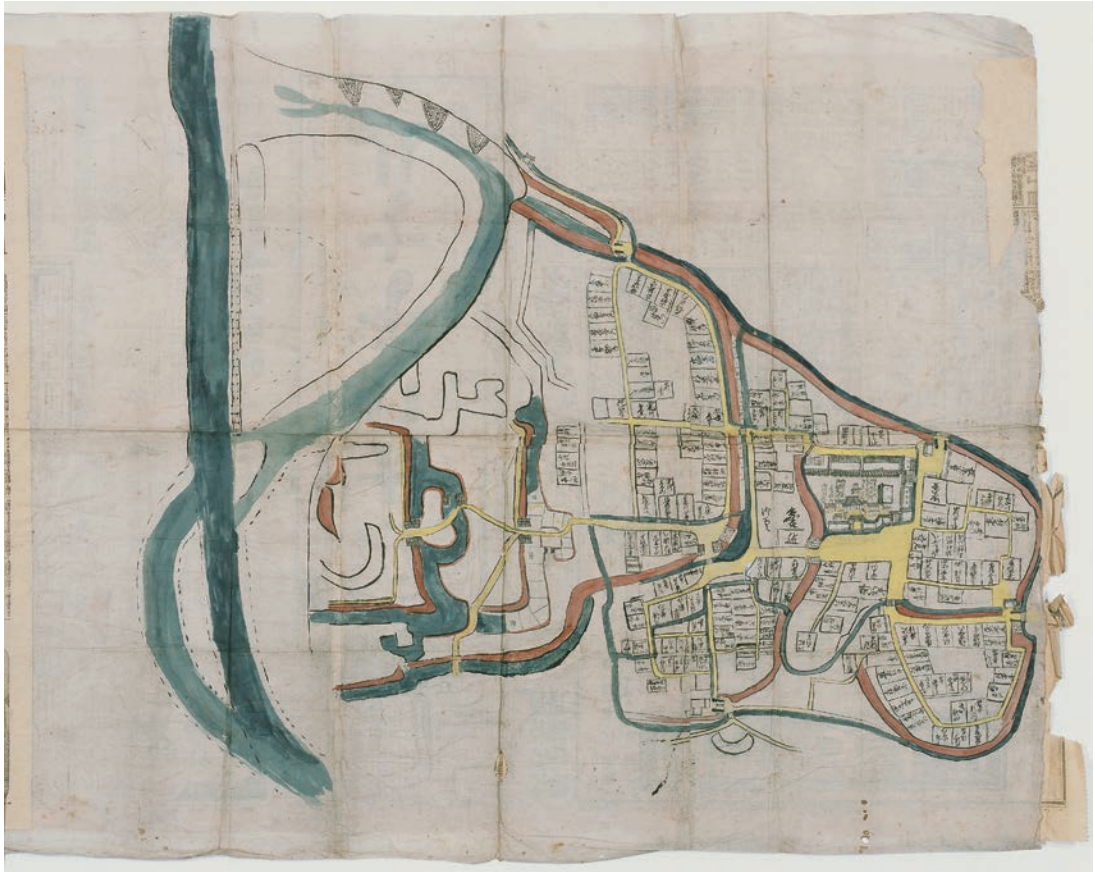
(4) 後世に書き写される城絵図

酒井時代の前橋城絵図は、江戸時代後期になって、何度も書き写されていることがわかる。特に19図の絵図は、同様なモチーフが何点か現存し、中には46図（個人蔵）のように天保期に個人が書き写したものも存在する。これは、この城絵図が、何か特別な意味を持って描かれ、模写されてきたのではないかとも考えられる。一〇〇年以上も前の城の状況を描いた絵図を書き写し、残すと言うことに何か特別な意味を考えざるを得ない。また、47図（個人蔵）は、描かれた年代が記されてはいないが、家臣名などから天保期の城絵図で、特に前橋陣屋の状況が克明に描かれていることから陣屋絵図として著名なものである。48図（個人蔵）はこれも家臣の一人が描いた再築前橋城築城開始前の状況を示した絵図である。これらの資料からは明和六年（１７６９）の城破却の状況とそれ以降の旧本丸、二の丸周辺の荒廃した様子、一部が水田として利用されている様子がよくわかる。

(5) 前橋市立図書館の書き写した絵図群

前橋市立図書館は大正四年に創建された、群馬県内でも最古の歴史を誇る公立図書館である。前橋市立図書館はその図書館草創期に、前橋の歴史資料を中心に積極的に収集にあたっている。今回の後半で紹介した絵図群の多くは、この図書館草創の時期に集められた資料群である。その当時の図書館員達は、まだ、東京の酒井伯爵家にあった絵図群を克明に模写し、前橋市立図書館に残しているのである。

特に、大正から昭和の初年にかけて図書館員あるいは館長として活躍する佐藤錠太郎（雲外）は、当時の郷土歴史雑誌「上毛及び上毛人」に前橋の歴史資料や、前橋城に関する多くの論考を発表している。前橋市立図書館がその草創期に、郷土資料館や博物館的な活動を積極的に行ってきたことを証する資料であり、既に、原本が現存しない資料もあることから前橋市立図書館の当時の仕事は現在、重要な資料となっている。当に知の殿堂としての図書館を表出する資料群である。



47. 天保期の城絵図（個人蔵）

48. 元治絵図（個人蔵）

参考文献

前橋市史第二巻　昭和四八年（１９７３）八月　前橋市

直泰夜話　昭和四一年（１９６６）一〇月　宮下藤雄

前橋市立図書館八〇年小史　平成九年（１９９７）三月　前橋市立図書館

前橋城絵図帳 ―前橋市立図書館所蔵資料―

平成二九年八月三日　印刷
平成二九年八月九日　発行

編集・発行　前橋市教育委員会事務局
文化財保護課
〒三七一―〇八五三
群馬県総社町三丁目一一―四
電話　〇二七―二八〇―六五一一

印刷　朝日印刷工業株式会社